

プライマリケアにおける 腹部単純X線写真の意義

財団法人脳神経疾患研究所附属 総合南東北病院 消化器センター長 西野 徳之

ドクター西野の
“気づき医療”のススメ

第3回

Q 次の2枚の腹部単純X線写真を見てください。
所見、すなわち病変はどこに存在するのでしょうか？
ヒント：共通点があります。
(答えは次ページに掲載)

症例4

85歳女性。



写真1

症例5

22歳女性。

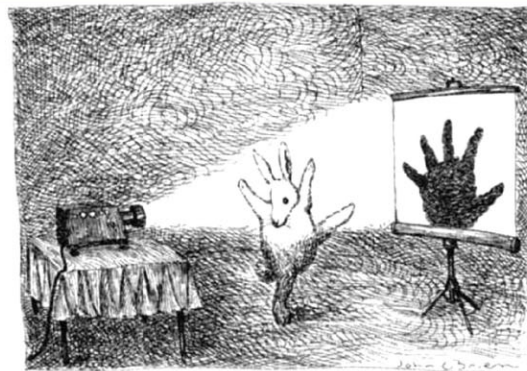


写真2



西野 徳之 (にし のりゆき)

1987年、自治医科大学卒業。旭川医科大学第三内科研究生。90年、利尻島国保中央病院内科医長。94年、同病院院長。2000年、根室市立病院内科科長。同年、総合南東北病院。08年より現職。日本消化器病学会指導医。日本消化器内視鏡学会指導医。産業医。内科認定医。



射影は高次元の対象物の情報をすべては伝えられない。

図1 射影(『ワープする宇宙』、リサ・ランドール著、NHK出版)

リサ・ランドール著『ワープする宇宙』で紹介されている‘次元’の考え方のヒントとなる挿絵です。ご覧のとおり、アニメにでも出てきそうなウサギが、二次元の投影像になると‘手のひら’に見えてしまう。実は、われわれが腹部単純X線写真を読影するということは、この逆、すなわち‘手のひら’を見て、ウサギを想像することなのです。もちろん、人の体の中にウサギはいませんが、腹部単純X線写真で‘手のひら’さえ見えないようでは診断になりません。写真の中で、どこに‘手のひら’があるのか、その‘手のひら’は何を意味するのかを考えるのが読影なのです。

読者のみなさまからの、「ドクター西野の“気づき医療”のススメ」コーナーへのご質問、ご要望、ご感想などをお待ちしております。

送り先 エルゼビア・ジャパン株式会社「PCP」編集部 e-mail pcp_kizuki@elsevier.com